

圭
あおおに
田
外伝

ひろしの秘密の一日

ノプロプス
noprops / 原作

くろだけんじ
黒田研二 / 著

すずらぎ
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

たけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイヤツ。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



怪物



ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所でこの怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

マロン

シーズーという種類の犬で、女の子。美香の家で暮らしている。



ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。



ハルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。親友のユズキをはじめ、生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんの悪事を知り、ひろしたちに協力してくれる。



クロさん

怪物のことを「ブルーデーモン」と呼び、宇宙から飛来したブルースターを集め、この世界をブルーデーモンだらけにすることをもくろんでいる。自らもブルーデーモン化できる能力を得た。



ユズキ

ハルナ先生の同級生として碧奥小学校に通っていたが、パラサイトバグを誤って口にしてしまい、ブルーデーモンになった。現在は力をコントロールできるといふようになり、人間だった頃の姿にも変身できる。





目次

よう せい ねんな こ
妖怪になった女の子 007

なぞめいたひろし くん いちにち
なぞめいたひろし君の一日 043

くんととど
たけし君に届いたラブレター 073

ぼくと
このなぞは僕にだけ解けない 131



よう かい
妖怪になった
おんな こ
女の子

東向きの窓から入ってくる心地よいそよ風にうとうととしていたぼくは、玄関口で会話を交わすお父さんと男の子の声で目を覚ました。

鼻を動かし、男の子のにおいを確かめる。

ひろし君だ！

ひろし君は近所に住む小学五年生。一昨日、おぼけ屋敷とうわさされていいる町はずれの洋館——ジェイルハウスで顔を合わせて以来だ。

そのときのこと脳裏によみがえる。あれはものすごい大冒険だった。いびつな頭をした青い巨人のことを思い出すと、今でも恐怖でからだがふるえてしまう。あんな体験は二度としたくない。今後、絶対にジェイルハウスには近づかないと心に固くちかつかつたくらいだ。

あれ以来、みんなとは会っていない。会えばきつと、あのおそろしい怪物のことを思い出してしまうだろう。みんなだつてぼくと同じ考えだと思っていた。だから、ひろし君が我が家を訪ね

てきたことにはちよつとおどろいた。

一体、なにを^きに来たんだらう？

立ち上がり、警戒心をあらわにする。ぼくはこの家のガードマン。あやしい人がやつてきた



ら、勇ましく立ち向かわなければならぬ。

「こんにちは、タケル君」

玄関に通じるドアが開き、ひろし君が姿を見せた。ひろし君はぼくのそばにしゃがみこんであごのあたりをやさしくなでる。あまりの気持ちよさに、ぼくの警戒心は一気にゆるんだ。その場に寝そべり、まぶたを閉じる。……まあ、結局はそんなもんだ。どんな優秀なガードマンもたぐみなマッサージにはかなわない。

突然、ひろし君の手が止まる。え？ もうおしまい？ もっとしつかりなでてほしいんだけど。

片目だけ開き、ひろし君の様子をうかがう。ひろし君はリビングのとなりにある和室を見つめていた。その視線の先にあるのは、ぼくのお父さんが毎朝毎晩、必ず手を合わせている仏壇だ。笑顔のお母さんがこちらを見てほほえんでいる。

お母さんが遠くにいつてしまつて一年が経つ。お母さんのことを思い出すと、今でも胸の奥がチクリと針をさされたみたいに痛くなる。ぼくの記憶の中のお母さんはいつも笑っていた。本当は病気で苦しかったはずなのに、そんな様子をまったく見せなかった。笑うと片方のほつぺただ

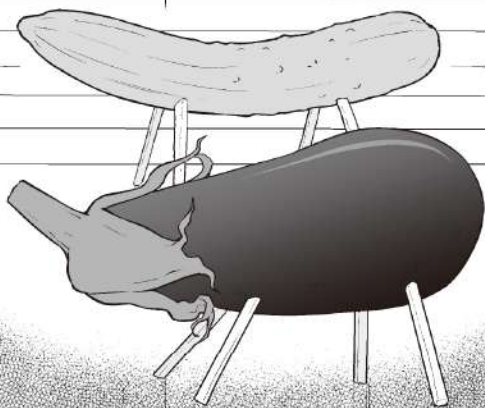
けにできるえくぼが大好きだった。ギョツとだきしめられると、お母さんのからだだからはあまいバナナのような香りがした。

ぼくのお母さんだよ。とつてもキレイでしよう？

仏壇のほうをじつと見つめたままのひろし君に得意げに説明する。もちろん、ぼくの言葉が伝わるはずはないのだけれど。

ひろし君は立ち上がると、まっすぐ和室に向かった。仏壇の前に置いてあつたキュウリとナスに顔を近づける。どうやらひろし君の気を惹いたのは、ぼくのお母さんの写真ではなく、仏壇前の野菜だつたらしい。

今朝早く、お父さんはキュウリとナスに割りばしをそれぞれ四本ずつつきさすと、それらを仏壇の前の小さな机の上に並べた。
どうして野菜なの？



ぼくは首をひねらずにはいられなかった。いつも仏壇の前にお供えしているのは、お母さんが大好きだった「甘味堂」の栗きんとんだ。もちろん野菜もよく食べていたけど、さすがにナスを丸ごと一本置かれたら、お母さんとはまどつちやうんじやないかなあ。

つきさした割りばしに支えられて、野菜は机の上でバランスよく立っていた。四足歩行の動物みたいなも見える。食べもので遊んじやいけませんって、この前お父さんにかくれてこっそり読んだ絵本に書いてあったはずだけど。

「シヨウリヨウウマですね。実物は初めて見ました」

ひろし君がぼそりとつぶやいた。シヨウリヨウウマ……なんだ、それ？ ただのキュウリとナスじやないってこと？

「へえ。さすがはひろし君。よく知っているね」

オレンジジュースの入ったコップを手に持ち、お父さんが部屋に入ってくる。

「三日ほど前にテレビでやっていたから、今年は作ってみようと思っただ」

お父さんからコップを受け取ると、ひろし君は「ありがとうございます」とていねいなおじぎを返した。

三日前といふことは水曜日。ぼくたちがジェイルハウスでとんでもない事件に巻きこまれることになった日の前日だ。水曜日の夜、お父さんはいつもへがんばるんばが司会を務める情報番組を欠かさず観ている。たぶん、そこで紹介されていたにちがいない。

精霊馬と書いて「ショウリヨウウマ」と読むそうだ。お盆になると、亡くなった人の靈魂はそれぞれの家庭にもどってくる。そのとき、あの世とこの世を行き来する乗りものとして使われるのが精霊馬だ。キュウリは馬、ナスは牛を表しているらしい。

「馬は死んだ人のたましいができるだけ早く生前の家に帰ってこられるように。逆に、牛はゆつくりと景色を楽しみながらあの世に帰ってほしいから。精霊馬にはそんな意味がこめられているみたいだね」

お父さんがそう説明すると、

「それは知りませんでした。とても勉強になります。オジサンはいろいろなことをご存じなのですね」

ひろし君はオレンジジュースをひと口飲むと、感心したようにいった。

「いや、へがんばるんばがテレビで話していたことを、そのまま話したただけなんだけど……」

頭をかきながらお父さんは気まずそうな表情をうかべる。

「……がんばるんば？ それはなんでしよう？」

ひろし君が首をかしげた。いろんなことを知っているひろし君だけど、どうやら苦手な分野もあるようだ。

仏壇前の野菜に鼻を近づける。

さつきまではただのキュウリとナスだったのに、お父さんの話を聞いたあとだと、それが馬と牛の姿に見えてくるから不思議だ。ほんの一瞬ではあるけれど、キュウリからほんのりとバニラの香りがただよってきたような気がした。

「ごちそうさまでした」

コップの中身をすべて飲み干したひろし君がお父さんに頭を下げる。

精霊馬の話に夢中になってすっかり忘れていたけれど、ひろし君はどうしてぼくの家を訪ねてきたんだろう？ まさかオレンジジュースが目的だったとは思えない。

「はい、どうぞ」

お父さんがなぜかひろし君に、散歩用のリードとバッグを手わたした。

「ありがとうございます」

ひろし君は受け取ったリードをぼくの首輪につなげた。

散歩だ！ 散歩だ！

自然としつぽが左右にゆれる。この世で散歩ほど楽しいものはない。

「散歩のコースはタケルがしつかりと覚えていてから、こいつにしたがつて進んでくれればいい

よ。それから——」

お父さんが散歩の注意点を細かく説明し始める。

散歩に出かけられるのはとつてもうれしいけれど……え？ どういうこと？

「ちようど仕事を立てこんでいてね。ひろし君が散歩に連れていつてくれるなら、とても助かる

よ

「今は夏休みですから、オジサンのご迷惑でなければ、毎日連れていきますよ」

「ありがたい話だけれど、ひろし君にだつていろいろと予定があるだろうか？ さすがにそれはち

よつと申し訳ないかな」

「いえ。タケル君のことをもつといろいろ知りたいのです。これからも遊びにうかがつてよろし

いでしょうか？」

「それはかまわないけど……」

「ありがとうございます。では行ってきます」

ひろし君はお礼の言葉を口にする、玄関に向かった。

ひろし君とはジェイルハウスの事件の前にも散歩で顔を合わせたことはあつたけど、せいぜいあいさつを交わす程度。ここまで積極的な交流はなかつたはずだ。どうして突然、こんなにも興味を持つてくれるようになったのだろうか？　なんだかちよつと気味が悪い。

もしかして、なにかたくらんでいたりするのかな？

ひろし君の様子をうかがいながら外に出たぼくだつたけど、草花のにおいをかいだとたん、警戒心ほどこかへふぎ飛んでしまった。楽しい散歩の時間に、あれこれよいなことを考えるひまなんてない。夕方近くになつて、暑さも少しやわらいだようだ。ぼくはいつものルートを軽やかに歩き始めた。

ひろし君がぼくの前に出る。お父さんはいつもぼくの後ろをついてくるから、ちよつと落ち着かない。ぼくは足取りを速め、ひろし君を追いぬいた。でも、すぐにまたひろし君に追いぬかれる。そのくり返ししがしばらく続いた。ぼくたちのスピードは次第に増していく。

だったら、ぼくの全力についてこられる？

お父さんと散歩をするときは、そんな無茶は絶対にしないのだけれど、ぼくもちよつとムキになつていた。

公園に向かつて一気にスピードを上げる。待つてくくださいタケル君、とへとへとになつて弱音をなく姿を想像していたのに、ひろし君は平然とぼくについてきた。

公園の手前でスピードをゆるめ、ひろし君を見上げる。おどろいたことにひろし君はあせひとつかいた様子がなく、平然とした表情をうかべている。

公園内には砂場で遊ぶ小さな子供が三人、木かげのベンチでは子供たちのお母さんと思われる女性がふたり、おしやべりを楽しんでいた。

公園のすみにある古びたブランコには男の子が座っている。ひろし君と同じくらいの年齢だろうか？ 人気アニメ「デビルくん」のTシャツを身に着けている。

ぼくはその男の子のことが気になつた。さつきからずつとうつむいたまま、少しも動こうとしない。もしかして具合でも悪いのだろうか？ 熱中症だったら大変だ。

リードをぐいぐいと引いて公園をななめに横切り、「デビルくん」Tシャツの男の子に近づ

く。男の子はかたを落とし、大きいため息をついた。なにかなやみごとをかかえているのかもしれない。

「そろそろ帰りましょう」

